

## ジンメル的女性論の研究（一）

石 塚 勝 雄

もし本論に読者があるとするならば、それはおそらく婦人問題ないし女性論に関心を持たれる人であろう。ところが本論のテキストの著者はジンメルという哲学者であるので、彼については余りよく御存知でない方も多いのではないかと考えられる。そこで先ず本論の理解に必要な限りの予備知識という意味で、彼の素描を掲げることとしたい。

まずドイツの哲学者ゲオルク・ジンメル (Georg Simmel) の生涯を概観しよう。彼は一八五八年プロイセンの首都ベルリンにブルジョア階級のユダヤ人を父とする七人兄弟の末子として生れた。父は祖父と同じく裕福な商人であり、ユダヤ教からカトリックに改宗した。母もユダヤ人でプロテスタントであった。ジンメルは姉の一人からピアノの手ほどきを受け、後にはヴァイオリンにも親しんだし、音楽への愛好は彼の後見人が音楽家であったためにさらに強められた。彼等はしばしば一緒に旅行もした。以上のことから分ることは、ジンメルは生粋のベルリン子であり、幼い時から都会人的な繊細な感覚を育てられ、文化的・芸術的な広い教養を身につけて成長したということである。これは本論の女性論にもよく現われている。

ベルリン大学卒業後、二十七才でベルリン大学哲学部の私講師となり、そのままその後三十年間この不遇な地位にとどまった。その原因については彼がユダヤ人であったことの外種々あげられているようであるが、これが却って在野的な純粋な洞察にみちた数多の人生・文化・芸術・社会学にわたる広汎な哲学的業績を生ませることになったと言

えないであろうか。

一九一四年、ジンメルは独仏国境の町シュトラースブルクの大学に招聘され、初めて哲学の正教授の地位につくことになった。赴任すると間もなく第一次大戦が勃発し、学園生活は完全に混乱し、少数の残留学生を相手として講義する破目となった。そのシュトラースブルクで大戦の終結する直前に肝臓癌で没した。時に齡六十。死の直前まで畢生の著『生の直観』(Lebensanschauung)の完成に努力した。死に直面しては「古代の哲人の如く従容として」死にいたと言われる。

つぎに、ジンメルの学的生涯はおよそ三つの時期に分けられるものである。各期の文献を一々あげすることは省略するが、第一期は実証主義的・進化論的・心理主義的傾向の濃い時代で、同時に弁証的方法をも駆使している。ジンメルは秀れた弁証法家であると言われ、これは各期を通じてのことであり、この男女両性論の根本的前提としても弁証法が取りあげられている。第二期の時期は、批判哲学の影響を受けて、新カント主義的傾向の濃かった時代である。しかし、新カント主義の認識論によりながらも、これを超えて「生」を究極の拠り所としているもののようである。第三の時期は晩年で、形而上学的・神秘主義的傾向が濃厚に見られる。晩年のジンメルは特に文化哲学に関心を示し、本論のテキストとなった論文もこの時期の著作の一つ『哲学的文化』(Philosophische Kultur, 1911)の中の一章である。

つぎにジンメルの大学での講義と文章について簡単に記す。彼の講義が単に博識であっただけではなく、靈感を伴い、話法には抑揚があって音楽的であり、潑刺として生彩があり、とにかく素晴らしかったことは余りにも有名である。講壇上でのジンメルは、単なる哲学教師ではなく、本当の哲学者であることを示したものとされる。それにかえ、彼のドイツ文の難解なことも有名である。これについても色々と言われているが、一時間の講義を二頁で書いたと言われるように、文章となるとエッセンスだけであること、奔流する思想の構成そのものが言わばダイナミッ

クであるのが、そのまま構文となって現われるからと言えないであらうか。この「女性論」のテキストとなっている文章もその類にもれないようであるが、格調の高い構成的なドイツ文の魅力をそのまま伝えることは、筆者にはとてもできないことなので、散文的・羅列的にして、理解の容易さを主眼とすることとした。

つぎに「女性論」構築の素材となったであろうと思われるジンメル<sup>(註一)</sup>の対異性関係を見よう。まず彼の妻ゲルトルトは生粋のドイツ人で、容姿も優美かつ典雅であった。幼い時にカトリックの洗礼をうけたが、母からはプロテスタントの教育を受けた。彼女は人生のあらゆる本質的な問題に独自の仕方ですつかり、業績としても哲学上の著作三冊<sup>(註二)</sup>を遺している。このように彼女は教養の高い女性で、彼等の家庭にはベルリンの精神的選良たちがよく出入した。ジンメルには特に親しい異性の心<sup>ブザム・フレンツ</sup>の友が二人あった。彼の著「宗教」(Die Religion, 1906)はこの二人の女性、ズスマンとカントロヴィッチに捧げられていることでも知られよう。彼女ら二人はともにジンメル夫妻の共通の友達でもあった。特にカントロヴィッチは勝気で美しい、詩人的素質にも恵まれたインテリ女性で、ジンメルとは特に肝胆相照した間柄であつたらしく、彼等の間には言わゆる「隠し子」ができたほどである。ズスマンとも親しかったことは、ジンメルの没後四十年を経た一九五八年にジンメルの『回想記』をも著したことでも知られよう。何れにしても、彼が特に親しく接触した三人の女性は何れも教養の高い婦人であつたことを、彼の「女性論」を読むにあたって念頭におく必要がある。

さて、筆者は哲学には素人であるので、ジンメル<sup>(註三)</sup>の生の哲学・歴史哲学・宗教哲学・芸術哲学・道徳哲学などの文化哲学について語る資格を缺くし、また彼の有名な社会学についても同様なのであるが、彼の「女性論」を読むにあたっては、彼の方法論的態度・学風などには一応触れておく必要がある。それは究極は生の形而上学の立場と云えようが、その立場がどんなものであるかは、彼が語つたつぎの三つの言葉に解り易く現われているように思う。第一は、彼は「物の心臓の鼓動」<sup>(註四)</sup>を聴くことのできる第一級の哲学者であると自認していた。これによって、彼は男性

でありながら、女性の心臓の鼓動を聴き分けたのであろう。第二に、「哲学者は万人の知ることを語る人間でなければならぬ。」<sup>(註三)</sup>と言った。これは、誰でも知っていることを究極的に根拠づけるのが哲学者の仕事だ、ということ

で、シヨープンハウエルなどにもよく現われている立場である。例えば世間でよく言う「女は魔物である」なども、

ジンメルによって究極的に説明されている。第三に、「私にとって以前から哲学の本質的課題と思われたものは、直

接個々のものから、単純に与えられたものから、究極の精神的意義を持つ層に測量錘を垂れることである。」<sup>(註四)</sup>これ

は、個別のものから究極のものへ達するという方法論で、よく言われるジンメルの多原理主義を表わした言葉で、平

易に言えば、真理はすべて寸鉄的である、ということになる。したがって、幸いなことには、彼の「女性論」を読

むにあたっても、彼の広汎な各種哲学の領域に関する知識を殆んど必要としないということになるのである。<sup>(註五)</sup>

(註一) 『心の存在と所有について』(Vom Sein und Haben der Seele, 1906)『性生活における現実性と法則性』(Realität und Gesetzmäßigkeit im Geschlechtsleben, 1910)『宗教的なものについて』(Über das Religiöse, 1919)

(註二) das Herz der Dinge klopfen

(註三) Der Philosoph soll derjenige sein, der sagt, was alle wissen.

(註四) Was mir von je als eine wesentliche Aufgabe der Philosophie erschien: von dem unmittelbar Einzelnen, dem einfach Gegebenen das Senkblei in die Schicht der letzten geistigen Bedeutsamkeiten zu schicken.

(註五) 以上は主として、阿閑吉男『ジンメル』(有斐閣)のIを素材として構成した。

x x x

さて本論のテキストとなったものは、前述の彼の晩年の作『哲学的文化』(Philosophische Kultur, 1911.)の中の論文「男女両性の問題における相対的なものと絶対的なもの」<sup>(註六)</sup>である。論文の表題からすれば「男女両性論」なのであ

るが、ジンメルによれば後述のように、人類の歴史においては、男性論即人性論・人間論として説かれてきたのであるから、実際は両性論は女性論に重点がおかれることになるので、かりに「女性論」とすることとした。原著の一パラグラフを一節として、その要点（時には大部分）を『 』の中に訳出し、研究をすすめることとする。この方法は、全体がダイナミックな交響樂的構成を持つジンメルの文章からすれば、好ましくないかも知れないが、本論はドイツ文の味読でもなく、純粹の哲学研究でもなく、婦人問題の立場からの研究であるので、止むを得ない、または當然のことのように思われる。なお、同書の中の別の論文「女性文化」(Weibliche Kultur)の中の女性そのものを論じた箇所を参照しながら、補充してゆくこととする。

なお、読者の便宜を計って、初めにジンメルの「女性論」全般に対する筆者の感想を記することとする。その一は、男と女とは、こうも違ったものなのかということである。その二は、ジンメルこそ、いわゆる女権主義者という意味のフェミニストではなく、「女性の心臓の鼓動」を聴き分けた、眞の女性の理解者・眞の意味でのフェミニストだということである。

(註) Das Relative und das Absolute in Geschlechter-Problem

—

『およそ精神的なものであって、大きな相対的な対<sup>たい</sup>を形成するもの、たとえば自我と世界・主観と客観・個人と社会・持続と進行・素材と形式、その他こういった色々のものはすべて、両方の側の何れもが必ず一度は、その固有の狭い意味(Bedeutung)とその対立者とを同時に包括する、一つの広い深い意義(Sinn)にまで成長するという運命を経験してきたのである。』(註)

本節は男女両性論を考察するに際して、その前提となるべき哲学的根本原理を述べたものである。これは弁証法的發展の原理と言えよう。ジンメルはその学的生涯の第一期から、弁証法的方法をも駆使しているのであって、きわめて鋭敏な弁証法家として知られている。つまり、ジンメルによって、人間の男女は弁証法の中に捉えられているわけである。

(註) G. Simmel, Philosophische Kultur, S. 67.

## 二

『人類の生活における基本的な相對關係は男性と女性との間に存立しているが、この關係においても、一對となっている二つの要素の一方の側が絶対的なものになるという典型的な現象が生じている。男性の本質及び女性的本質から来る行為と意見・強烈さと外部的な形成の形式、これらの価値をわれわれは一定の規範に則って測定しているわけであるが、これらの規範は中立的なものではなく、すなわち両性の対立を免れたものではなく、それ自体がすでに男性的なものである。(中略) 芸術的な諸々の要求や愛国心・一般的道徳や特殊な社会理念・実践上の判断の正当性や理論的認識の客観性・生命の力や深さ——これらの範疇のすべては、その形式とその主張によれば言わば人間一般的なものではあるにしても、その實際の歴史的形態においては徹頭徹尾男性的なものである。もしわれわれが絶対的なものとして登場してくる前述の諸々の理念を一度無造作に客観的なものと称するならば、人類の歴史的な生活においては、客観的<sup>ひとたひ</sup>男性性、という方程式が通用するわけである。人類にあまねく行きわたって、おそらく深い形而上的根拠に根ざしていると思われる一般的な傾向、すなわちそれぞれの意義と価値決定とが接近したものとして認められるような一對の對極概念から、一方の概念を取り上げて、今度は絶対的意味を

持たせた上で、さらにその概念に両極の完全な対立関係と平衡関係を包括させ、そして支配させるという傾向、この一般的傾向が人類の男女両性間の基本的な関係のうえにも、一つの歴史的な範例を作りあげているのである。<sup>(註)</sup>以上を要約すれば、人類社会における学問・道德・芸術その他社会生活上の万般の価値規準は、その形式・その主張に従えば男女別を問わない全人間的 (allgemein menschlich) なものだとしても、現実には徹頭徹尾男性的なものである。男性的であるにすぎないものが絶対的なものとなって、客観的なもの・普遍的なものとして通用しており、それが人類社会の歴史的現実だというのである。よく言われるジンメルの相対主義・歴史主義が、ここに早くもすでに現われたわけである。

真理とは、男女別とは無関係なものだと教えられてきたわれわれにとって、これは革命的な論理と言わねばなるまい。ジンメルは前記引用文の中であげた数々の範疇の中に「理論的認識の客観性」(die Objektivität des theoretischen Erkennens)をも含めてはいるが、自然科学の実験可能な分野については、この言わば男性主義を貫徹し通すことはできないであろう。ただ男性の好む分野・得意とする分野だけが開拓されてきたとは言えるであろう。前記引用文の(中略)の中で例外的な場合・倒錯した場合は除外することわっているが、これはそれに該当するものと言わねばなるまい。ジンメルがあげている例外の今一つを記すならば、彼が「女性文化」の中で数学について述べた左の一節である、「すなわち、精神文化の最も醇化した形象である数学は、おそらく、他のどんな精神所産以上に、男性的なものと女性的なものとの彼岸にあり、その対象は知性の異なった反応をひき起す機縁となり得ないのである。そしてこれから、数学においては、他のすべての科学におけるより以上に、女性が深い研究と重要な業績を示したということが説明される。」<sup>(註)</sup>つまり、数学の抽象性は男性数学・女性数学の区別を許さないと言っているのである。

しかれば、人間社会における学問・道德・芸術などの大部分は客観的(普遍妥当的)なものとして装われていて

も、その実男性的なものにすぎないとする、言わば男性絶対主義はいかにして可能であり、いかにして支えられているのであろうか。これに答えるものが次節である。

(註一) G. Simmel, op. cit., S. 67ff.

(註二) ibid. S. 297. 阿閉吉男訳『世界大思想全集、社会・宗教・科学思想篇第十六卷』河出書房新社、昭和三四年、一四八頁。

### 三

『男性が女性に対して相対的に優<sup>まさ</sup>っているだけではなく、男性が普遍的・人間的なものとなり、これが、男性的な個々の事柄にも、女性的な個々の事柄にも、一様に規範を与えているということ——このことは色々な媒介を通してではあるが、男性の優位<sup>ゆうゐ</sup>によって支えられているのである。もし男女両性の歴史的関係を極端にも主人と奴隷との関係として表現してみるなら、自分が主人であることを必ずしも考える必要がないことは主人の特権の一つであり、一方奴隷の地位の方は奴隷が決して自分の地位を忘れることのないようにさせているわけである。男は自分が男であるという意識を無くしている場合よりも、女が自分が女であるという意識を無くしている場合の方が非常に稀<sup>まれ</sup>であること、これはどうしても認めないわけにはゆかない。男は自分が男性であることを心のどこかで同時に感じたりすることなしに、純粹に事物に即して考える場合が無数にあるように見えるのに反して、女は自分が女であるという明暗何れかの感情を決<sup>き</sup>って失われないように見えるのである。これが決して消え去ることのない下地とな<sup>な</sup>って、その上に女の全生活内容が演<sup>は</sup>ぜられているわけである。(中略) 男性の本質の諸々の発現は、男性としての特殊性を超えた、中性的な即物性<sup>(註一)</sup>と妥当性の領域へと高められやすいのである。このことは、男が言わば無邪気に全く即物的なものと考<sup>かん</sup>えている、ある種の判断・制度・企劃・関心をば、女の方では徹頭徹尾男性的性格を



表わしているものと感ずる、という無限に通例的な現象のうちによく現われている。(中略) 古来、すべて主観的優位に基づく支配というものは、客観的基礎付けを獲得すること、すなわち権力を法に転ずることに重大な関心をよせてきたのである。政治・聖職・経済組織・家族法の歴史はこうした例証に満ちている。家族に命ずる家長の意志が「權威」として現われるかぎり、家長とは、もはや権力を勝手氣儘に利用する者ではなく、家族の利害の超個人的で普遍的なものを志向する客観的合法性の担当者であるわけである。これと同じ方式で、またしばしばこれと同じ状態で、男性と女性との間の支配服従の關係が男性の本質の現われを變貌させている心理的優越が言わば論理的優越へと転化するのである。この論理的優越は、男性の本質の表現が、男女を問わずあらゆる個人に一樣に妥当する真理性と正当性を公示するところまで、規範的意義を要求するに至るのである。」<sup>(註1)</sup>

まず最初のところでジンメルは、男性が女性に対して相対的に優っている(überlegen)ことを認めているが、これは前節の所論から推して、知力の例外的な一部分とか体力・腕力などだけについて述べているのであろう。J・Sミルも、原始社会において女性の腕力が劣っていた事実が、そのまま支配服従關係に転化されて現在に至っているにすぎないということを述べている。ジンメルにおいては例えば、哲学において女性が劣るとしても、それは言わば男性哲学が哲学一般になっていることからくるのであるから、絶対的には言えないことなのである。

何れにしても、前節で述べた言わば男性絶対主義は、ジンメルによれば、男性の優位(Machtstellung)によって支えられているという。この優位とは社会的優位を指すことは明らかであろう。というのは、男女の歴史的な力關係を主人と奴隸との關係に類比して説明しているからである。しかも実感的・体験的・実証的に巧妙に説明されている。

つぎに、この力關係の優位から男性的なものが次第に客観的なもの(即物的なもの)へと発展して行く過程が述べられているが、それが一応のものにすぎないことは、女の側ではあくまで男性的なものにすぎないと感じていること

で証明している。

つぎに、男女関係以外の社会関係の分野でも、主観的優位に基づく支配が客観的基礎付けを獲得する（権力を法に転ずる）ことに重大な関心をよせてきたとし、その歴史的例証をあげている。これは平易に言えば、半ば見せかけの支配が行われてきたということで、たしかにその通りだと思う。かくして、ジンメルによれば、男女間の支配服従の関係も社会関係一般の分野における支配服従関係の一例にすぎないという。しかも注意すべきは男性の心理的優越が男性の本質の現われを歪めていることである。このような心理的優越が論理的優越へと転化し、普遍妥当性を要求することになるのであるから、男女間の支配服従関係の場合は、特に罪が深いとでも言うべきであろうか。

以上ジンメルの所説の特徴は、ショーペンハウエルなどにおけるように徹頭徹尾形而上学的に女性論を展開するだけではなく、さらに歴史的・社会科学的認識をも加えていることである。歴史哲学上の業績をも遺し、「形式社会学」という社会学の一派を創造した彼としては当然のことと言えよう。人間の男女はすでに歴史的・社会的存在と見るべきであろうから、彼がこのような認識を試みたことは至極妥当であったと言えよう。しかも彼においては、この女性論全般にわたって、形而上学的考察を試みた部分と歴史的・社会科学的認識を試みた部分とが比較的明瞭に分離されていることは、彼の考察の鋭敏・繊細さを物語るものと言えよう。

つぎに本節の内容について考えて見るに、道徳・芸術・理念・思想など総じて価値観に属する分野において男女別を認め、男性的なものの支配的傾向を説くジンメルの所説は首肯できる。しかしさらに進んで彼は、客観世界の法則の認識にまでも男女別を認めているもののようにである。すなわち前節では、徹頭徹尾男性的なものの中に「理論的認識の客観性」をも入れているし、本節では、男が無邪気に全く即物的（客観的）と考えているものが、女の側では徹頭徹尾男性的性格を表わしているものと感ずると述べている。こうなると、ジンメルによればア・プリオリな範疇による理論的認識の普遍妥当性（客観性）などは否定されることになるであろう。ジンメルの相対主義とか多原理

主義とか言われるものは、ここまで貫徹しているものなのであろうか。

(註一) ジンメルにおいては、即物的 (sachlich) とか即物性 (Sachlichkeit) という用語がしばしば使われる。これは事物に即する・対象に即する・客観に即するの意で、反対から言えば、心には即しない・主観には即しないの意で、結局、客観的・客観性と同じ意味である。

(註二) G. Simmel, op. cit., S. 68 ff.

#### 四

『このようにして男性的なものが、そのまま客観的なもの、さらに實際上の規範にまで絶対化されるということ——しかもそれは経験上の出来事ばかりではなく、男性的なものから生まれた、または男性的なもののために生れた種々の理念や理念上の要求までも、性の差別を超えた絶対的なものになるということ——これが女性の受ける価値判断にとって宿命的な帰結となっているのである。ここに、一方では女性を神秘化する過大評価が成立する。すなわち男性が、以上述べた一切のことに無関係に、完全に独立した規範の基盤の上に立つ一存在 (女性を指す筆者) がここにはあるのだという感情を抱くにいたるや否や、この存在 (女性を指す筆者) に対する価値基準は、もはや一つもないことになり、この未知なるもの・理解し得ざるものに対する、あらゆる過大評価と崇敬の可能性が開かれることになるのである。

しかも他方においては、もっと卑近な場合であるが、一つの実体 (女性を指す筆者) が男性とは全然反対なものを指向して創られている価値基準によって評価されるという点から、ありとあらゆる誤解と過少評価が生れるのである。この場合、女性原理の独立性は全然認められ得ないのである。』<sup>(註)</sup>

以上の前段においては、西欧の原始社会における禁制的<sup>タブー</sup>女性観、騎士道その他における女性崇拜、日本の巫女などの思想、「外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」とか「女人は大魔王なり、能く一切の人を食ふ」などの仏教の女性観、其の他一般に魔女（witch）の思想、さらに「女の仕返しは三層倍」などにおけるような女性恐怖や恐妻思想などの根拠が明快に説明されている。後段の場合は、男は大を善とし、女は小を善とする（妻を細君と言う）、男は強を善とし、女は弱を善とする、男は剛を善とし、女は柔を善とする、男は勇を善とし、女は情を善とする、などの場合を指している。この点から女に対する蔑視と誤解が生れたのである。古来多くの「女嫌い」（woman-hater, misogynist, der Misogyn）が生れたが、それは前段の理由からのものあろうし、後段の理由からのものあろう。何れにしても、この辺りは、ジンメルの言葉「哲学者は万人の知ることを語る人間でなければならぬ」が、明快に実証された箇所である。なお、こうした場合の女性原理の独立性が全然認められないことが、男性の社会的優位に拠ることは所説から明白であろう。

（註） G. Simmel, op. cit., S. 69ff.

## A Study of G. Simmel's View of Womanhood (1)

### Résumé

In the first place, a rough drawing of the life, individualities and character of G. Simmel, German philosopher and sociologist, is made under the necessity of a preliminary knowledge of this subject.

According to Simmel, the relationship between the male and the female of human beings is grasped in the so-called dialectic.

The artistic demand, the universal morality, the peculiar social idea, the objectivity of theoretical recognition—all these categories are, according to their form and pretension, universally human, but in their actual, historical formation, thoroughly masculine. The things above stated are supported by the powerful situation of the male.

Thus, the masculine, in that condition, becomes the objective and is absolutized,—this brings about, for female valuation, a fatal consequence, namely, on the one hand, an extravagant mysterious valuation of the female, on the other hand, an under-valuation and a misapprehension of the female.